



1979 年 (昭和 54 年)

3 月号 (No. 405)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 55年ぶりの徳本峠越え
(三田幸夫) (1)
入野谷便り—フランス帰り(?)の弁—
(交野武一) (2)
自然保護情報 (3)
冬・春山のゴミを持ち帰ろう
山のゴミ—蛾ガ岳で考えたこと—
ブラヴァンド氏の山案内手帳(4)
(岡沢祐吉) (4)
図書紹介 (6)
図書受入報告 (10)
お知らせ
54年度通常総会 (5)
第21回技術講習会 (10)
会務報告・ルーム日誌・会員異動 (11)
カット/梅谷隆一

▶ 日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み

▶ 図書室開設時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

五十五年ぶりの徳本峠越え

三 田 幸 夫

この老人が引張り出されて一言しゃべれと言う話ですが、なんかアンパンの話(注1)がでて大変名譽なような、また名譽でないような気がするんです。

自然保護とあんまり関係ないんですが、今日はちょっと感じたことをしゃべらせてもらいます。

アンパンから言いますが、僕は非常に有名な酒のみなんです。アンパンとかそう言ったものは酒のみは食わないような事をよく云うんですが、僕は酒は毎日相当のみます。飯のあとになにかアンパンのものがないと淋しい。家でも必らず僕のためにいろんな菓子が揃えてあります。ウイスキーを飲んでそのまた後で菓子を食べとか、ち

よっとおかしいように思うんですが、自分にとって非常にうまいんでそれを続けているわけです。

さっき、その峠越えの話が出まして五十五年ぶりだなんていうとすぐ大変な年寄りに思えるんですが自分じゃそれ程年をとってないと思うんです。いつか山岳会で僕が歌(注2)をうたったら非常に若

若しいって皆に評判になった。まあそんなわけで、五十五年ぶりですが、僕は最後に徳本峠を越えたのが、たしか大正十二年だったと思います。それまでこの上高地からいろんな所、涸沢だとか穂高、槍と方々、しょっちゅう入っていたんですが、それ以来、残念ながらほとんど上高地の山へ来たこと

がないんです。ただいろんな講習会的なもので、冬山の合宿的なものには参加したことがあります。自分から山を越えたことはない。しかし、自然保護の会をやるんで、いろんな地方の方が見える、非常に面白い人がいるからと言うんで、それじゃひとつ徳本へ行って見ようかということになったんです。

徳本峠といっても、この中で地方から来られた方ではない方があるかも知れませんが、なんとと言っても、日本の山の中ではたいした峠です。僕も随分何回も越しておりますが、今言ったように大正十二年が最後だった。しかもその後半は、僕はたいがい冬山でしかからスキーをはいていろんな道具を持って越えたわけですが、非常に苦しかったけれども僕達にとっては非常に新鮮で面白かったわけです。上高地はあまり泊らないで徳本峠を下りて、そのすぐ

下に牛番小屋というのがあったのです。冬はそこは使っていません。空屋でアバラ家で風の非常に通りのいい涼しい所なんです。当時寝袋もものがなかったわけですので、僕は冬山でどうやって暖かく寝られるだろうと言うことを非常に研究したんです。

仲間の一人がエスキモーとかオロチョンとか、北極に住む民族はアザラシの皮を着物にしたりしてちっとも寒がらないんです。その着物を着ていれば雪の中にじかに寝ても平気だと昔からの生活をしておる。それにヒントを得て、われわれはその時代、どうしたらアザラシの皮を手に入れられるだろうかと非常に研究したんです。なかなか手に入らないんです。それで横浜の南京町という町に密猟者

が一人いることを発見して、それが北海のアザラシの皮をだいて持っている。その買出しに頼さんと死んだ松方三郎とかで南京町に乗り込んで、その密猟者を探しあて折衝したんです。向うもそんな皮を扱う奴はいないんで両方ともあまり値切ったり、ふっかけたりしないで相談がまとまって、それは何十枚かその当時はかなりの金ですが、それを買ってすぐ慶応義塾の近所にあるテント屋に持って行って寝袋を作らせたんです。それでそれを着たり、その中へ入って寝ると汗がいちゃうぞと皆に言われたんですが、それを持ってわれわれは冬山を始めた。

いまの徳本峠にもどりますが、それをかきいでスキーをはいてわれわれは下へおりてきてその牛番小屋という吹きさらしの小屋へ入っちゃうんです。非常に寒い零下でしたが、そのアザラシの袋に入って寝ると確かに暖かいんです。その当時は適当な布なんかなかったんで僕はそれでずっと冬山を通してききました。最後には、カナダのロッキーのアルバータと言う山へ始めて海外遠征登山隊を出したんですが、その時もわれわれはその重いアザラシの寝袋を担いでカナダに渡った。カナダの連中

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

は非常に驚いていました。それは重い上になめしてないから非常にくさくなるんです。しかし暖かいからわれわれはそれを使って山の上の岩登りをして稜線でビバグなんかしたこともあります。そんな時も僕の友達でキャラバンという靴の会社をやっている佐藤という人がいます。その佐藤君(注3)は非常に器用で、

「三田さん、トナカイの皮で、チョコッキか小さな上着を作って上げよう。」

それはトナカイの皮ですが、非常に軟かくて、僕は作ってもらってアルパータへ登ったわけですが、山の上で一晩ビバグしました。非常に寒かったが、僕はそれを着ていると非常に暖かい、みんな羨ましがられたのですが、そういつたことがわれわれの冬山につながった。いまはいろいろな物が出来て、あんな馬鹿なアザラシの皮なんて持って行く人はいないでしょう。

そんなことを今日ちょっと峠を越しながら思い出したんです。最後に峠の頂上近くになって非常に急になつてきて息が切れると、誰いうとなしに何故こんな苦しい思いをして山にやってくるんだらう(注4)、山登りをやる連中がいつも言う言葉ですが、誰も口には出さないでも心の中ではこんな苦勞をして何になるんだらうと言うことは誰も思うことだらうと思いま

す。

われわれは苦しい山にぶつかるときにそれを繰り返す、しかし家へ帰ってくるのを忘れてしまふ。またその苦しみを楽しみにしてもういっぺん行ってみようということになるわけですが、山登りをやる連中は皆同じ考えを持ってのるんじやないかと思えます。別に金もうけにもなんにもならないし、どんなプラスになるか、これは人によって違うでしょうけど、まあそういうことを繰り返してだんだん年をとってくる。

僕ももうじき八十歳ですが、もっと先輩でもそういう人がたくさんいます。まあ皆さん、若い方が多いでしょうけど、あんまりバカバカしく思わずに適当に山登りを楽しんで続けて行かれるようにお願いします。失礼しました。

(この原稿は、昨年九月九日に開かれた自然保護委・第四回上高地集会の折の談話を小倉厚氏が整理したものである)

*1 アンパンは峠のすぐ下で折井副会長が出したもので、三田氏(注2)がそれを食べたことから話題となった。

*2 「山」第三九五号 三田氏「守れ権現」を歌うを参照。

*3 佐藤久一朗氏(会員番号一六三〇)。

*4 急な坂道で鈴木郭之担当理事がつぶやいた言葉。

「なんで山に登るんだらう。こんなアホラシイことして。アホラシイと思って頂上についたらアホラシさを忘れてしまふそのアホラシさ。」

入野谷 便り

——フランス帰り(?)の弁——

一月号の会報「山」をみてびっくりしました。仙丈岳の真下の三峰川の奥に腰をすえていた私が、フランス帰りにされて「しばらくフランスに行つて東京に帰りましょう。永年会員……」と私が年次晩餐会の席上でしゃべっているように記されておりました。これは私に記されておりました。「しばらく三峰川の奥のウラ(浦)に参つておりました……」の、ウラをフランスとききとめられたのではないのでしょうか。会報を読んでびっくりすると同時に、なんとなくほくそ笑んでしまいました。

* それはそれとして、永年会員に推されたことはなんとも晴れがましく、会員としてろくなお役にもたれ得ず五十年。あれこれ、過ぎこし方をふりかえってみますと、山を通してのよしなし事が思い浮んでまいります。日比谷の交差点市電の停留場で木暮さんに出会い承つたりしたこと、戦争になって図書係をやらされていた私は、磯野さん、中野さん、村尾さんと毎夜虎ノ門のルームにつめて図書の整理をして、全部カードをつく

交野 武一

り、JACの貴重な蔵書は木函につめていつでも持ち出せるようにしておいて、ついに引き受け手のないままに、ビルとともに罹災してしまつたこと、戦争の終りに近い十九年の十二月に、茨木さんや中司さんとウェストンのレリーフを上高地にはずしに参つたこと等等、想い出は限りなく湧いてまいります。

*

この仙丈岳の麓に近い過疎部落に参りましたのも、「ふとしたご縁で」とも申しましようか。しかし私の心の底に、年をとって山を歩けなくなった時に好きな山を眺められる所で晩年を送れたらという下心があったのかもしれない。三峰川の奥も、かなり前から造材が入っていたそうですが、まだ私の茅舎から四、五時間、人の入ったことのない原始林が残っています。南アスパー林道が何か大正の初めの頃の「みずゑ」(四九号)の山岳号に大先達の石井鶴三氏が、三峰川を廻行されて仙丈岳に行かれた時の紀行文の中に「……仙丈岳の溪から斧の音の来るのを聞きました。人間があんな

奥まで入って来て、木を伐つて行って紙にこしらへるのだという事です。あの森林も年々荒らされてゆく事でせう……」と嘆じておられます。私も晩年期に入りました。登りたい山もありますが、若い人たちの足手まといになるのは嫌です。アクティブな山登りはお若い方たちにおまかせいたし、残る年月をいまだ残されているこの周辺のジェントル・ウィルダネスが損なわれぬように、つとめて参りたいと思っております。

*

一昨年の年末、シエラ・クラブのオットー・ハークさんからクリスマスのご挨拶にGentle Wilderness「The Sierra Nevada」というすばらしい書物をいただきました。この書物は、リチャード・カウフマンという写真家で幼少の頃からシエラ・ネバダを歩き廻っておられて現在シエラ・クラブ、カナダ山岳会の会員の書かれたものです。編輯は、同じくシエラの会員のダーヴィッド・プロワー氏で、カウフマンのすばらしい写真旅行記をテキストにしたと記されています。一昨年末の入院中、この書物は病院暮らしを楽しいものにしてくれました。そして思いついたので、まだまだ残されている日本の山岳のジェントル・ウィルダネスをJACの会員の手に、かつての「高山深谷」の如き

書物をつくれぬものだろうか
と。

*

穂高岳の白出谷で近くなられた
茨木さんが、戦争に入ってから
ある時おめにかかった際「ぼくは
無器用で絵しかかけない。この戦
争がどうなるかわからないが、い
まのぼくに出来ることはこの美し
い祖国の山々の自然美を描いて残
しておくことだけだ」といわれま
した。そして晩秋の穂高岳に赴
て不帰の人となられました。ぜひ
写真の上手な会員方で「高山深
谷」を作っていただけたらと思
います。回想は、それからそれへ
とづいてつきません。この地に根
をおろして十余年。山の中に暮
らして感じていたのですが、若い頃
の峰からこの峰へとひたむきに登
っておいりました頃に見落していた
山の美しさがたくさんあることに
気がつきました。晩年の山はそれ
なりにつづく楽しいものと思
います。

*

炉の薪も燃えつきたようで寒さ
が腰の下からあがって参りました。
私についての誤報の説明が脱
線しましたが、この辺で筆をとめ
ます。末筆ながら、ふとしたこと
から私に筆をとらせて下さった方
方にお礼を申し上げます。

(昭和五十四年二月八日夜)

*

・自然保護情報・

冬・春山のゴミを持ち帰ろう

——自然保護委と環境庁合同会議——

・自然保護情報・

日本山岳会の自然保護委員会で
は、例年冬山シーズンを迎えて現
役の大学山岳部のリーダーを集め
て「冬山のゴミ持ち帰り」の徹底
を要請してきた。昨年十一月三十
日(木)、本会ホールにおいて十
一大学、二十二名の現役の主将、
リーダーらを集めて実施した。特
にこの会合には、異例のことであ
るが、環境庁の金子太郎自然保護
局長並びに同庁同局の中島良吾保
護管理課長も出席し、それぞれ同
様主旨の要請を行った。

山岳地域におけるゴミ処理、ゴ
ミ持ち帰り運動は環境庁をはじめ
各種自然保護団体、ボランティア
あるいはマスコミなどによる熱心
な啓蒙活動によって最近では国立
公園内における有名観光地帯やハ
イカーなどの集まる一般登山道や
山小屋周辺、尾根筋などはいわゆ
一般登山者の意識の昂揚とともに
かなりの改善がみられるように
なった。そのため現時点ではむしろ
逆に岩場における幕営地(たと
えば奥又白、三の窓など)や冬山
のゴミの放置などいわゆるベテラ
ン登山者のみしか行かないと思わ
れる地域のゴミの汚染が目にする
ようになり、世の指弾を受けるよ

うになった。特に冬山におけるゴ
ミ処理は雪の中に埋めると表面は
きれいになるが、融雪期になると
現われゴミの山となるというやっ
かいなものである。そこで同委員
会ではこの状態を放置すれば将来
登山者にとってゆゆしき事態を招
きかねないので、それらの啓蒙運
動を進めるためまず現役の大学山
岳部のリーダーらを集め「冬山の
ゴミ持ち帰り」の要請をしようと
したところ、環境庁でも同様主旨
の要請があり、これがたまたま一
致したため今回の異例の合同会議
となったものである。

会議は六時三十分より鈴木邦之
自然保護担当理事の司会のもとに
まず出席者全員の自己紹介にはじ
まり、山本良三委員長、折井副会
長、日山協同見常務理事がそれぞ
れの立場から自然保護の重要性
と、冬山のゴミ持ち帰りの徹底につ
いての説明がなされた。

その後、環境庁側から金子局長
さらにその補足という形で中島課
長から別添のような強い要請がな
された。

なお穂高岳山荘の神氏からは山
小屋経営の立場からゴミ処理の苦
心談——山小屋は今ゴミとの戦いで

あり、「山の空気」と称して空カ
ンにシールをはり空カンの持ち帰
りを成功させた話なども披露さ
れた。また、「全部ゴミは持ち帰
るという精神に徹すれば必ずずで
きるし、第一、計画、準備の段階
から違ってくる。持ち帰れないの
は屎尿だけだ」という中村委員か
らの厳しい発言もあった。

続いて現在の大学山岳部の冬山
のゴミ処理の現状について各大学
からの説明に移った。それによれ
ば一部にはざんげ的な報告もなさ
れたが、かつての千年万年(千年
万年たてばゴミも土になる)式の
考えは姿を消し、大部分の大学で
は余った石油を利用してゴミを焼
却したり、さらに米袋のビニール
袋やゴミカートンなどをつかって
燃えない生ゴミ、ティーバックや
燃え残りカスなどは夏山のゴミ集
積地まで持ち帰ったり、余った食
糧は全部里まで持ち帰ることなど
を實行している。なかには煙草の
吸いがら入れまで持参させている
パーティ(日大)もあり、さすが
統制のとれた大学山岳部と思われ
るものが多かった。ただし他の社
会人パーティまで呼びかけるの
は勇気のいることだけに、まわり
の他のパーティにも聞えるような
大きな声で「ゴミは持ち帰るぞ」
と叫ぶのがせいぜいだという正直
な報告もあった(防衛大)。

席上特に問題となったのは冬山
のデポ用に使う石油カンの処理で

あった。デポからデポを伝って歩
く形式の登山をしている大学では
まだ放置しているという状態であ
ったが、しかしこれについてもカ
ンを使用するのは山麓まで、あ
とはビニール袋とかアルミホイル
を利用するとかで解決している大
学もあり、環境庁側からは毎年同
一地点で繰返し使用したり、ある
いは夏にふたたび荷下げ登山計画
をもつことなどのアドバイスやア
イデアの提供が行われた。

このように大学山岳部で見る限
り優等生的であり、山はよけれ
ない筈であるが、現実には大変よ
れているので、委員会としては、
このままでは法的規制(入山料等)
も考えられるであろうから「冬山
のゴミの処理は大学山岳部が模範
となって他の社会人パーティの啓
蒙役になって欲しい」と要望、来
春もう一度反省会を開くことが提
案された。

総じてゴミ処理に対する各大学
の意識は上級生の態度が大きく下
級生に影響しているようで、その
点今回の会合は成功であった。

【出席者】金子太郎(環境庁自然
保護局長、中島良吾(同庁同局
保護管理課長)、折井健一、渡辺
正臣、織内信彦、中村純二、大野
俊夫、国見利夫、宮下啓三、鈴木
満子、小倉厚、山本良三、内村鉄
次郎、小林茂、池田智津子、神憲
明(穂高岳山荘)、五十嵐、立教

大学—小無節郎、丸岡博昭、伊藤克也、慶応大学—福井健太、原田規弘、中村勝行、国際商科大学—原田正志、日本大学—中村日出、鈴木弘之、学習院大学—平尾陽太郎、酒井、深沢、東洋大学—鈴木章、東京農大—秋本友紀、芝浦工大—宮本明男、東大—駒宮博男、和泉純、防衛大—木村孝、大石直洋、狩野隆平、国学院大学—ツヅキ外一名。ほか報道関係二名計四十四名

(小倉 厚)

△環境庁からの要望書▽

拝啓

時下 益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、我が国の代表的な山岳は、近年急速に綺麗になってきました。これは登山者のモラルが向上したこと、各種団体ボランティアによる呼びかけや清掃活動が活発になったこと、国、県、市町村などの清掃補助金が活用されるようになったこと、これらを受けて地元関係者が清掃に積極的になり出したことなどによると思いいます。

しかしながら、関係者の努力にもかかわらずさっぱり改善のあとが見られないところも多く残っています。その双璧は、一つは富士山であり、もう一つは雪解けの北アルプスであります。富士山については、素人が一生の思い出に多

数登って見る山です。最終的には何らかの規制に訴えざるを得ないと思いますが、雪解けの北アルプスの汚染は、選ばれた登山家、本物の山男が汚していることですから規制に訴えて改善を図るのはおかしいと考えます。

そもそも登山者の汚したものを、ボランティアの善意や国民の税金だけで跡始末をすること自体が納得のいく話ではありません。北アルプスの冬山に登るような皆様は山を愛し、山的美観を保つ熱意にかけては人後に落ちることは絶対にはないと思います。わたくしどもは、規制に訴える前に、皆様方が奥又白や岳沢などに空カンや不要になった糧食などを絶対に捨てないようにされることを期待します。

これだけお願いすれば山の専門家のみによる汚染の問題などたちどころに解決するとは思いますが、もし今年の冬山においても事態が改善されない場合には、冬山登山名簿を頼りに、清掃に必要な経費を何らかの形で皆様方に負担して頂くというような方法も考えざるを得ないと思っております。どうか、このような悲しむべき事態を招かないように貴会傘下の各団体、岳人に御指導していただくことを心から期待する次第です。

敬 具

昭和五十三年十一月三十日

ブラヴァンド氏の

山案内人手帳 (4)

岡 沢 祐 吉

秩父宮の山行

p. 83

Zernatt

Folgende Touren hat S.K.H. Prinz

Chichibu von Japan mit Herrn Bravand

gemacht.

Wetterhorn

Finsterarhorn—Agassizoch—Strahllegg-

hütte Gross Schreckhorn—Traversierung

nach Gletscheinthütte Kingspize—Traver-

sierung Teufelsjoch—Ochsenattel

Gross Engelhorn

Urbach Engelhorn

Yashio

Yuko Maki

J.A.C. S.A.C.

Gr. wald.

ツェルマット

一九二六年九月八日

次の山行は秩父宮殿下がブラヴァンド氏と行ったものである(写真は前号五ページ参照)。

ヴェッターホルン

フィンスターアールホルン—アガスイヨッホ

—シュトラールエグヒュッテ

グロースシュレックホルン—グレックシュタ

インヒュッテへの縦走

キングシュピッツェ—トイフェルスヨッホか

らオクセンザッテルへ縦走
グロースエンゲルホルン
ウルバッハエンゲルホルン

雅 仁
榎 有恒

J.A.C. S.A.C.

グリンデルヴァルト

秩父宮殿下のスイスにおける山行については「山岳」に詳しく述べられているが、この案内人手帳はブラヴァンド氏が同行したものについての記録なので、ヴァリスでの山行は載っていない。従って八月十六日のヴェッターホルンから二十五日のグロース・エンゲルホルンまでである。ブラヴァンド氏はこの手帳とともに、当時のアルプスも見せてくれたが、この中には殿下が山頂で山案内人達とお撮りになった写真などがあつた。戦争のため焼失し、日本には残っていないような写真が多く、このアルプスもまた日本の登山界にとって貴重なものとなるに相違ない。ブラヴァンド氏を訪ねた数日前、私は秩父宮殿下がたどられたと同じフィンスターアールホルンからグレックシュタインヒュッテへのコースをやってみようと思い、カンデルシュテックの最年少の山案内人シュトララー氏に、その詳細を尋ねてみた。まず最初に、ユングフラウヨッホからコンコルディア・ヒュッテまで、腰ぐらいある雪の中を、約一時間滑降することがいかに大変かを説明された。六月の初めであり、この年は七月になっても天候が悪く、その都度降雪をみたからでもある。コンコルディア・プラッツからフィンスターアールホルン・ヒュッテへの横断がまた一苦勞、フィンスターアールホルンからアガスイヨッホへの降りには重い荷を背負って、むずかしい岩を攀じねばならない。そこからフィンスターアールヨッホへ

環境庁自然保護局長

金子 太郎

社団法人日本山岳会

会長 西堀栄三郎殿

社団法人日本山岳協会

会長 渡辺公平殿

・自然保護情報・

山のゴミ

—蛾ヶ岳で考えたこと—

小林 茂

・自然保護情報・

一月二十七日、織内信彦さん、横山厚夫さん夫妻に同行するため、高尾発一〇時五十分の甲府行電車に乗った。登山コースは身延線市川本町—四尾連湖(泊)—蛾ヶ岳—折門峠—三方分山—精進湖である。それは十二年前のやほり一月に、藤島さんや望月さんたちが歩いたのと同じコースだった。

御坂山塊南部を身延線から入山し、富士急河口湖に出る周遊の面白さもさることながら、湖畔の民宿での語らいもあって、格別な味わいのある静かなる山旅になった。

54年度通常総会の

お知らせ

日本山岳会昭和54年度通常総会は左記の日時におこなわれます。議題その他詳細は、会員各位に別途ご案内いたします。

日時 昭和54年5月11日(金)
午後6時より
場所 東京都千代田区九段北四
一—二五 私学会館
(国電および地下鉄有楽
町線市ヶ谷駅下車徒歩3
分)

そんな静かなる山にも、登山者のモラルを疑いたくなる悲しい現場がいたるところにあったからたまらない。とくに、甲府盆地と盆地をとりかこむ山々の眺望に恵まれた蛾ヶ岳山頂は、その風景を飲み干したあとの空罐の山だった。春になれば地元の人たちによって清掃されるのだろうとは思いますが、山の心を想えば、この日も満面の姿で登山者を迎えたかったにちがいない。

蛾ヶ岳山頂の空罐の山を見てしまったから、これから先は拾えるだけ拾って麓に持ち帰ろうと私は決心した。同行した南園由美子さんに手伝ってもらい、空罐約四〇個ほかを麓におろした。雪に隠れたところは別にして、蛾ヶ岳から精進湖までの尾根道沿いはほぼきれになったと思う。

ところで、なぜ山のゴミ問題を自然保護活動の一環として山岳会が取り組まねばならないのだろう。もっと自然破壊に対決することが自然保護活動の本筋ではないかと思う人は多いにちがいない。

ブラヴァンド氏の山案内手帳 (4)

の降りとはなるとちよつと考えられない。どうしても東側に出るのならオーベルアール・ヒュッテから往復するしかない。さらにこれに要する日数は余裕を見て一週間から十日、山案内人に支払う手数料だけでも二千フラン近くかかる。その他に客側で負担せねばならない宿泊代や天候——このコースをやることの不可能なことがわかった。もちろん時期にも関係はするが、一夏でこのコース以外にヴェッターホルン、エンゲルホルン、マッターホルン、ツィナールローホルン、モンテローザとやるのが如何に大変かがよくわかった。モンテローザに

登った時は一歩進んでは一息ついた、小屋では食欲不振のため終夜頭痛がありよく眠れなかった、と殿下御自身書いておられるが、約一カ月にわたるこういった山旅をよく消化されたものと、改めて敬意の念をもよおさずにはいられなかった。

渡辺八郎氏の山行

p. 84~85

Grindelwald
den 26. Sept. 1926

Vom 15.—24. September führte uns

Herr Sam. Brawand. Die Touren,
die wir gemacht haben, sind:

Traversierung von Mönch

von Guggihütte über Nollen

(den 16. Sep.)

Finsterarhorn von Finsterarhorn-

hütte: und nach Oberarjochhütte

(den 18. Sep.)

Traversierung von Hörnli grat

von Grindelwald nach Alpiglen

(den 22. Sep.)

Traversierung von Eiger über d.

Mittellegigrat.

Mit Abstieg nach kl. Scheidegg

(den 24. Sep.)

Mit seiner Führung sind wir immer

ganz zufrieden.

H. Watanabe

Yuko Maki

Saburo Matsukata

Grindelwald

Grindelwald

Samuel

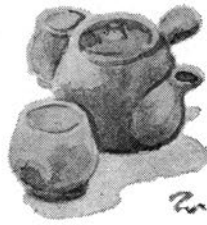
Blavand

氏は九月十五

日から二十四日までわれわれを案内して

確かに、本当の自然保護とは自然破壊に対する保護であって、その対象は個人との関係にあるのでは決していない。しかし、本来的に自然保護論者であるべき登山者が自らその模範を示さないまま、つまり逆に言えば、そうでない弱みを自然破壊論者に握られたまま、いくら自然保護を叫んでも真なる破壊者と対決することはできないだろうと私は思う。

いうまでもなく、山のゴミ問題はモラルの問題であり、意識の問題である。山を愛する者が山のゴ



ミ問題を論じ、その尻ぬぐいを同じ山仲間がおこなうこと自体、恥ずべきことにちがいない。しかし、ゴミ問題が個人のモラルの問題である以上、そのモラルと自然保護意識の向上がはかられるならば、やがて解決できるという期待がもてる問題でもあるといえる。

山に登る人ばかりでなく、山歩きを楽しむ、山の本を読み、思索する人も岳人なのと言ったヤングの言葉を借りれば、真なる岳人にはさらに山を汚さない人という条件がつくのではなからうか。

図書紹介



飯 豊 第9号

一ソビエトの
山々・ほか一

新潟大学山の会
新潟大学山岳部

旧制新潟高校山岳部時代からの

夢「飯豊から氷河の山々へ」を見事に実現させ、幅の広い海外登山を實踐して来た記録のまとめである。副題の通りソビエトの山々がその中心だが、サラグラール等への登頂を果たした一九六七年度の東部ヒンズークシュ遠征を皮切りに、一九七一年及び七三年のクリミヤでの岩登り競技会への参加、そして一九七四年のパミール遠征ではレーニン峰、一九七五年はカフカズの山々、隊に合流した一九七六年のパミール行では念願のコムニズム峰にも登頂している。

B5判横書き、ペーパーバックの地味な会報だが、実現しなかったカムチャッカ計画（一九六六）に始まり、田村俊介氏という有力な協力者との出会い、そしてこの会がわが国でのソ連邦山岳へのパイオニア的役割を果たして来た経過

ブラヴァンド氏の山案内人手帳 (4)

くれた。われわれがした山行は——
九月十六日 グギイヒュッテからノーレン経由
メンヒの縦走

九月十八日 フィンステルアルホルンヒュッテからフィンステルアルホルン及びオーベルアルヨッホヒュッテへ

九月二十二日 ヘルンリ尾根の縦走

グリンデルヴァルトからアルビグレンへ

九月二十四日 アイガーの縦走

ミッテルレギ尾根経由クライネシャイデックへ

われわれは彼の案内でいつも十分に満足している。

渡辺八郎 JAC

榎 有恒 SAC

松方三郎 グリンデルヴァルト

この八十四ページの山行についても「山岳」に載った記録でそのおおよそが語られている。ただ、その記事がヘルンリ尾根を中心に語られているため、他の部分に充分触れられていない。そこで若干の補足を試みる。

当時のメンヒ登山でグギイヒュッテからノーレンを経由する山行は、日本人としてはこれ以前にはない。辻村伊助氏にしても榎さんにしても、最初は南側のユングフラウフィレンから登っているし、松方さんも尾根伝いにメンヒに登っているのだ、矢張り当時一般にとられていた南西稜のルートからと思う。このノーレン経由北西壁は、現在でも状況によっては十二時間も要するコースだから、僅か一行ほどで語り終えられるものではない。また九月十八日のフィンステルアルホルンについては、スイス人女性二人を同伴したという白くつきのものであったため、オーベルアルヨッホヒュッテに泊ったことはあまり知られていない。ブラヴァンド氏のアルバムにこの小屋の前で撮ったお三方の写

真（前号七ページ参照）があったので複写したのだが、どうも他のときと様子が違って撮れている。このヒュッテからはゲムスリュッケ、グリンホルンリュッケと越えてユングフラウフィレンを通行し、ユングフラウヨッホへと戻るのがグリンデルヴァルトへの最短距離。したがって十九日の行動も同様に見過せないと思う。

九月二十二日からのヘルンリ尾根はヒックと呼ばれる問題のキレットで、約四十五メートルのハング気味スラブに妨げられ、アルビグレンに下ったところ。二十四日はそこからミッテルレギ稜を越え、この尾根の第二登をおこなった。現在このルートがあるため、わざわざ危険なヘルンリ尾根からアイガーを目指す者は少ないようである。

1886/87

「日本にいる時すでに榎君から聞き知っていた君と、この一月以来知り合いになり得た縁を喜びます。

さて、この夏は一カ月にわたり、若い友だちの後について、アルプスの山また山と登り歩いた際に、君はいつもエミール・シュトイリ君と注意深く僕の綱をとって、初心者僕に少しの不安も感ぜしめず、美しいアルプスの秘める深い、また大きい神秘に親しく触れる手がかりを与えて下さったことを、心から有難く思います。

さらにまた、君が現に多くの教え子をこの里に持たれていることは、長年日本で同じ経歴を持つてきた僕にとって、一層感じの強いものがありました。山の「案内人」は、また同時に里の「案内人」でなければなりません。

さらばブラヴァンド君、幾年ののちにか、僕のいとしい子等をアルプスの学びの園へ送る日あらば、君の信念ある綱のもとに、思いのままに導きたまえ。

が克明に記されており読みごたえがある。

また「ソ連の山に関する文献目録」なる労作は貴重な資料であり、白嶺史朗氏の「コミニズム峰登頂」や田村氏の「国際岩登り大会一九七六」など部外者の執筆も、この会報をより充実したものにしている。

前記主要記録の他にも、ヒスパニア越え、サラリチ偵察(一九七四)、台湾行、マレー半島タハン行、ミランダオ島ローワーパコ行、ボルネオ、東アフリカ(キリマンジャロ、ケニヤ、ルーエンゾリ)行、エチオピア、さらに南ドイツ、ヨーロッパアルプス等、世界をめぐめる会員の楽しい手記がある。

B5判、二三四頁、一九七八年八月発行、新潟市旭町一ノ七五七新大医学部法医学教室気付、新潟大学山の会 非売品 (越田和男)

山に見える町

渡辺 宏之 著

昭和初期、恵まれたよき時代に学生々活を送った著者は、慶応山岳部に籍をおき、コッコツと北アルプスや上越の山を歩く。そして大学ノートに山行の印象記などを

書きとめていた。その後、三越へ勤めていた青年時代、引き続き楽しんだ数々の山行記録が、三越山岳部会報「岳」にも残されている。それらのものと後年執筆された随想とを集めて二六五頁の本にまとめ私家版として出したものである。

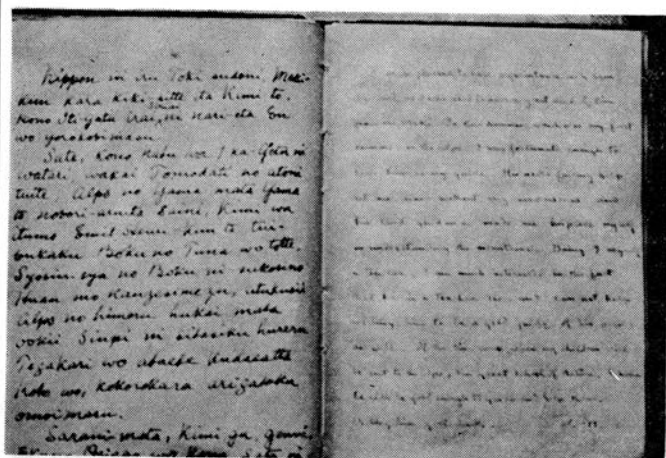
ここで著者について少しばかり紹介しておきたい。渡辺宏之氏は本会々員である。慶応の登高会々員でもあり、現在、栃木県山岳連盟の会長をやっている。ついでにいうと、栃木県財界に重きをなしているだけでなく、教育委員会、社会事業関係等各方面で活躍している。

秩父の金山平にある木暮さんの記念碑の台座の大谷石が、渡辺氏の寄贈によるものであることは、ごく一部のを除き知られていないが、著者御当人はそれについて一言もふれていない。謙虚な著者の人柄によるものであろう。本書全体がこの謙虚というか、そういう姿勢で貫かれていことは何よりも好感のもてることだ。

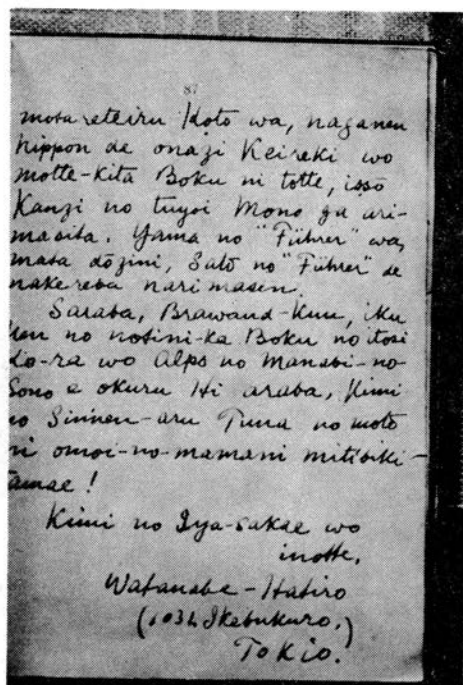
昭和六年五月の谷川岳、十月の清水峠から笠ヶ岳、十二月の八ヶ岳縦走、昭和七年十二月の御岳など、最近の登山とは一味違う落ちつきのある山登りの仕方が味わわれる文章である。

昭和六年夏、穂高の横尾谷で著者は私と出会う。共通の山の先輩である石塚照雄さんがサイパン島へ行くことになった消息を、私か

ブラヴァンド氏の山案内手帳(4)



86ページ、渡辺氏の筆跡と松方氏の英訳(右ページ)



87ページ、渡辺氏のローマ字綴り

て 君のいや栄えを祈つ

渡辺八郎

(東京・池袋一〇三一) 二ページにわたる渡辺さんのローマ字で書かれた文を、松方さんが英文に直し、ブラヴァンド氏はこれを頁の間に張りつけてあった。日付は書いてないが、ページの続き具合からしても、ここにある記録の八十六ページから八十七ページまでは九月二十六日に書かれたものと思う。「山岳」に書かれた渡辺さんの文を読んでもそうだが、ここに書かれたものを読むとスイスアルプスへ示す惜別の情を読み取ることができる。ブラヴァンド氏の持つ信念が必ずしもブラヴァンド氏個人のものでないことを知れば、先輩たちの網をつたわって流れたものが、古きよき時代のもので捨て去り得ない何かがあると私には思われる。

ドーフイネ山群の松方三郎氏

P. 92~93

Grindelwald

den 18. Sept. 1927.

den 3. Aug.

Mittelgruppe von Engelhörner

den 6. Aug.

Die erste Traversierung des Hörnigrates.

den 9. Aug.

Jungfrau

den 14. Aug.

らに聞いた渡辺氏は、前穂高を、さらに徳本峠を越して休む間もなく横浜埠頭へかけつけ、同氏を見送りに書いた、槍穂高の紀行文のなかに書いている。著者らしい体温のぬくもりを感じてなつかしさを覚えた。

本書には横有恒氏、慶応以来の山仲間河野幾雄氏、旺玄会所属の洋画家木村信氏（いずれも本会々員）が序文の筆をとっている。横さんの序文のある本は、そうたくさんはないと思うが、本書は数少ないその一つであろう。

宇都宮市大谷町一〇八八 屏風岩石材部、頒価一〇〇〇円・送料共

一高旅行部の足あと

縦の会編

(縦内信彦)

さきに発行された「一高旅行部五十年」、「失いし山仲間」につづいて、六年目に発行されたもの。前の二冊に洩れていた仲間の登山記録や感想などを集め、あわせて新しく失った岳友たちの追憶のため編まれたものという。

本会となじみの深かった日高信六郎氏や、藤島敏男氏の追悼文をそれぞれ大木操、黒田正夫、森喬

の各氏が述べており、なつかしく読んだ。

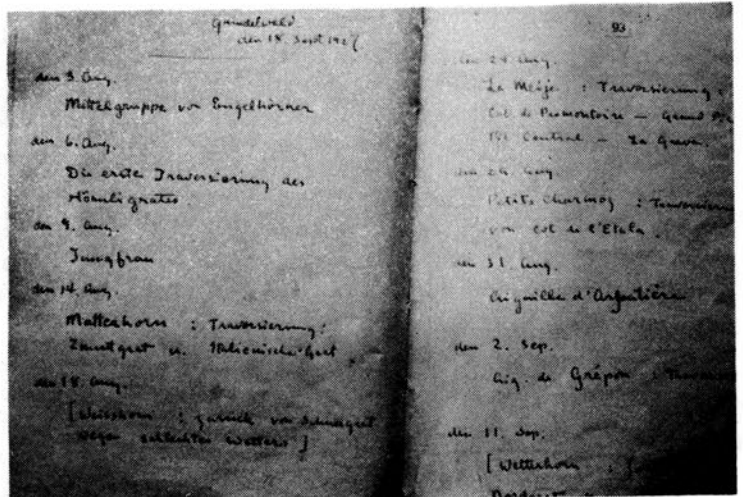
北アルプスの早期登山記録として、大正二年七月の燕岳から槍ヶ岳への縦走の紀行、当時時事新報に発表された「日本アルプス跋渉記」の再録や、大正三年七月の大木操氏による「鹿島槍から劔岳へ」など、北アルプス初期の登山資料としてもきわめて貴重なものである。前者は大木氏が「あとがき」を付記され、上高地からの焼岳や前穂高岳への登山記を書かれ、前穂高頂上での辻莊一、鹿子木貞信、茨木猪之吉氏らとともに撮した写真は珍しい。後者は大木氏の写真とともに回想記ふうにかかれていて、八峰キレット、五竜岳三角点、大黒鉱山跡、黒部峡谷吊橋などの写真は、当時の登山風景をとどめており、これまた私などにとって非常に興味深いものである。

大木氏は前書で「頑張り通して山に生き抜き、一高旅行部縦の会百年の足あと」を公にしたい」といっておられる。そのファイトに期待したい。

昭和五十三年六月三十日、一高旅行部縦の会発行、一八六ページ、写真多数、四〇〇部限定販売品、頒価二五〇〇円、希望者は東京都世田谷区新町一七九岡本信一郎氏あて申し込めばよい。

(山崎安治)

ブラヴァンド氏の山案内手帳 (4)



92~93ページ

Aiguille d'Argentiére
den 2. Sep.
Aig. de Grépon: Transversierung
den 11. Sep.
[Weishorn: zurück vom Nordgrat wegen schlechtes Wetters]

グリンデルヴァルト

八月三日 エンゲルヘルナーのミッテル
グリュッ

八月六日 ヘルンリ尾根の初縦走

八月九日 ユングフラウ

八月十四日 マッターホルンツムト
稜、イタリア稜と縦走

八月十八日 (ヴァイスホルン悪天のため雪稜から引き返す)

八月二十四日 ラ・メイジュ縦走「プロ
モントワールのコル——グラン・ピッ
ク——ピック・サントラル——ラ・グ
ラーヴ

八月二十九日 プチ・シャルモをレタラ
のコルより縦走

八月三十一日 アルジャンチエール針峰

九月二日 グレボン針峰の縦走

九月十一日 (ヴェッターホルン悪天のため
北尾根より引き返す)

この頁には松方さんが書き込まれてるが、同行したのは浦松さんであり、エミール・シュトイも案内人として同伴している。

八月六日はアイガーヘルンリ尾根を初縦走されている。このことは前にも述べたが、前年、渡辺さんと横さんとで試み、途中キレット状になったヒックと呼ばれるところで行く手を阻まれ、アルピグレンへ下った場所。障害となった

ハンク気味四十五メートルの階段には現在固定

白き山嶺

—Dhaulagiri-V

1971—

果陵山岳会

「その時三人はものすごい勢いで雪の斜面をコーナボーンめがけて落ちていきました。それで、えーと、手袋とか身につけていたものはバラバラになって一緒に落ちていきました」ダウラギリV峰から南にのびた稜線上の高度六九五〇m地点から手塚英信、柳沢利文、青木憲一の三人の間がコーナボーン谷へ一気に三〇〇〇mあまり滑落していくのをサポーターに出ていた飯村富彦、壺関治郎両隊員がほんの二〇〇mほど離れた地点から目撃し、第二キャンプの矢崎源市隊長ヘトランシーバーで知らせた。一九七一年プレモンズン果陵山岳会ヒマラヤ遠征隊の予期せぬ遭難死亡事故であった。

すべての現地での処理をすませて帰国した同隊にはマスコミや岳界からの集中的な非難が及びせられた。悪いことには長野県関係の遠征隊で同じ時期に信州大学隊のアンナプルナ峰、そして、ポストモンズンの長野県山岳協会のガンガプルナ峰と遭難が続き、さらに一九七三年の日本山岳会信濃支部隊のアンナプルナI峰でも遭難

が発生した。同会をとりまく風は冷いものとなっていったであろう。それから七年後、亡き三氏を想い、会の発展を熱望する会員の手によってダウラギリV峰の記録を主とした本書が発行された。

記録はよく整理されており、痛ましいまでに刻明である。記録、遭難、各担当報告、座談、追悼と遺稿、随想、資料の各章から成っている。

また、II部からIV部までには果陵山岳会の主として海外遠征の記録がまとめられている。最後のV部には手塚宗求による「果陵山岳部創草の頃から」という回想記がある。同氏による「序にかえて」の巻頭の言葉とともに、果陵山岳会の重々しく、しかし自由な伝統と栄光をよく示している。遭難をきっかけとしてちりぢりになってしまいう山岳会が多いなかで、このような立派な報告書を出版された同会の底力に頭の下る思いである。特に編集にたずさわった飯村、壺の二会員の努力におうところが多いように思う。両氏は追悼文や紀行「三回忌ヒマラヤへの旅」(飯村)、「雨期の晴れ間に」(壺)などに見られるように抒情的な暖かい目で物を見、人の心を打つ文章の書ける人であるのも本書にふさわしい編集者であったといえよう。

「二ヵ月振りにカトマンズへ帰った時、人々の賑わいは惨めなギャ

網が張ってある。

八月十四日からは天候が崩れはじめ、マッターホルンのツムット稜でも、ヴァイスホルンの東尾根でも山行は極めて酷しく、この様子は浦松さんの書かれたものの中でも触れられている。同行したエミール・シュトイリも「ヴェッターホルン西尾根初登攀」(「スイス山案内人は語る」所載)の中で、お互に自分のことなぞかまわず助け合い、尾根を越え風を抜けたと述べている。

八月二十四日のラ・メイジュについては、ブラヴァンド氏の書いた「嵐の中メイジュへ」で詳しく述べられているが、この時も暴風雪だったとエミールは書いている。八月十八日のヴァイスホルン雪稜というのは、東尾根にある最後のジャンダルムを過ぎたところから始まり、山頂に達するにはそこから二時間ほどを要する。三年後、国分貫一さんはこの尾根を経てシヤリ稜へと縦走されている。現在ヴァイスホルン西側フランケには、一九六八年に冬期ルート(グレートV)ができ、主尾根のみでなく他からも山頂へ達するルートが開拓されている。

八月二十四日のメイジュは、ラ・ベラルドでの食料調達がうまくいかず、チーズは目標の半分、マギススープについては名前も知られていなかったとある。途中グラン・ピックでも雷に遭ったが、この時はまだそれほどひどくなく、山頂から嵐についてピック・サントラルへ向かう途中でまた雷に遭遇。ほぼ四時間、硫黄の臭いがする電光を発し、ところかまわず落雷する様子は、魔王の一族が狩をしながら、ガリアの広野に迷いこんだようだったとブラヴァンド氏は書いている。頼りにしたレグルの小屋は使いものにならず、霧が立ちこめ、音もなく降り続く湿った雪の中を、不案内な氷河に沿って小走りし

にくだり、「やっと湿ったザイルをザックにしまうことができた」とこの山行を語り終えている。

モン・ブラン山群のアルジャンチエール針峰に登り、プチ・シャルモやグレポンを縦走で登る。プチ・シャルモはコル・ド・レタラから登り、コル・ド・ビュシュへ下り、グレポンはグラン・シャルモから登りナンチヨンのコルへ下ったのかも知れない。国分貫一さんがエンゲルヘルナーのマクドナルドチムニーを登られた時、ブラヴァンド氏はそこがグレポンのママリチムニーよりむしろかしこいと話したとのことだから、この時松方さんも浦松さんも、クラシクな装備でグレポンのママリク拉克を登ったことになる。

九月十一日のヴェッターホルン北尾根は、フエーンもよい吹雪で、西尾根をやるつもりでかけたのを、途中であきらめ引き返したところだ。まだ使っていない新しいハーケンを小屋番に預け、翌年の夏を期したとエミールは書いている。この日をもってスイスでの山登りを締めくくられた松方さんにとって、後髪ひかれる夏の終りだったのではないかと思う。九月十一日、夏の終りの山行にヴェッターホルンを試みた、とエミールは書いている。ブラヴァンド氏の手帳に松方さんが書き込まれた九月十八日は、この地域での登山季節はもう終わった。

(次回は浦松佐美太郎氏ほか)

* * *
* * *

ラバンより嬉しかったが、私にとっては果物屋の娘を見る度、つい先日のように思える光景が浮んできた。しかし、ミカンを買う気になれなかった。たとえミカンを買ったとしても、一体誰と食べれば良いのか……一緒に食べるべき人はもういないのだ。彼女はまたいづもミカンを買ってくれた人がいなくなってしまうのを知る由もなかった。

三年後、再び私はカトマンズへやってきた。同じ場所に娘はいなかった。彼女に逢えれば柳沢さん



の笑顔が思い出せるかも知れないのにと彼女のいなくなったのが残念であった(「追悼・柳沢利文兄」飯村)より。

「三個のペイグラントとなった彼らの遺骸は春の雪崩とともにカリ・ガンダキを下り、やがてベンガル湾に流れるだろう。輪廻転生の仏教思想の発生の地であるインド亜大陸に吹く悠久の風の中に舞うブルーゲンピリアの紅い花びらが、ガンジス河に浮いて流れ、彼らのあとを追うだろう。所詮人と人との出会いは一期一会、悠久の風の中

●図書受入報告

(昭和53年2月～8月)

図書委員会

大修館書店寄贈

- 覆刻日本の山岳名著 全 18 点22冊
(書名省略) 昭50
日本山岳会「会報」第1号～第100号覆刻合本 昭50
解題書「覆刻日本の山岳名著解題」
日本山岳会編 昭50

津田周二氏寄贈

- 水野祥太郎著「山野スキー術教本」黒百合社 昭7
- 水野祥太郎 津田周二著「山に聞く」黒百合社 昭13

稲田定重氏寄贈

- 日本ヒマラヤ協会編「ヒマラヤ研究 XII Expedition II」日本ヒマラヤ協会 昭53

各務良幸氏寄贈

- 各務良幸 麻生武治著「山岳大観」木星社書院 昭6

山下潔氏寄贈

- 静岡大学カラコルム遠征隊編「テラムカンリ 1975」静岡大学山岳会 昭53
- 静岡高校紫岳会 静岡大学山岳会編「紫岳」朝日出版社 昭52

古川純一氏寄贈

- 横浜山岳会編「P29南西壁報告書 1974年」横浜山岳会 昭52

阿岸明子氏寄贈

- 阿岸充穂著「大地の詩」日本カメラ社 昭53

中村純二氏寄贈

- 縦の会編「一高旅行部の足あと」縦の会 昭53
- 縦の会編「失いし山仲間」縦の会 昭47

著者・訳者又は編者寄贈

- ラインホルト・メスナー著 岡沢祐吉訳「マナスルの嵐」二見書房 昭53
- 日本山岳会学生会部編「年報第6号」茗溪堂 昭53

- ヤニック・セニユール著 近藤等訳「希望のアルピニズム」森林書房 昭53
- 西尾寿一編「溪谷4号」西尾寿一 昭53
- 松本健夫著「山・探検・フィールドワーク」玉川大学出版部 昭53
- 千葉大学ヒマラヤ委員会編「東ネパールの登山と調査」昭53
- オギノ芳信著「ナマステ・ネパール」昭53
- 小尾博己著「北沢峠」諏訪文化会館出版部 昭51
- 平井一正編「シエルビ・カンリ」神戸新聞出版センター 昭53
- 日本山岳協会 日本K2登山隊編「白き氷河の果てに」講談社 昭53
- 徳久球雄編「コンサイス日本山名辞典」三省堂 昭53
- 札幌山の会編「薄雪草」札幌山の会 昭53
- 岩手県ガールズワールヒマラヤ親善登山実行委員会編「デビスタンI峰」昭50
- 日本ヒマラヤ山岳協会編「ヒマラヤ研究 VII チベット・ラダック研究」日本ヒマラヤ山岳協会 昭48
- 日本山岳会日印合同婦人ヒマラヤ登山隊編「日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書 1968」日本山岳会 昭43
- 小西政継著「ロッククライミングの本」白水社 昭53

出版社寄贈

- 高田直樹著「なんで山登るねん」山と溪谷社 昭53
- 原真著「乾いた山」山と溪谷社 昭52
- 朝日新聞社編「写真集・ヒマラヤの高峰」朝日新聞社 昭53
- 学習研究社編「世界山岳地図集成一ヒマラヤ編一」学習研究社 昭53

(つづく)

お知らせ

第21回登山技術講習会

これから本格的な登山を志す初級の方を対象にした積雪期登山の基礎技術を中心に、懇親の意味を含めて残雪期の谷川岳で講習会をおこないます。男女を問わず多数参加ください。宿泊設備の都合で、申込み受付は三十名に限り、ますので、ご了承ください。

日程 昭和54年5月18日(金)

費用 一人九〇〇円(宿泊・

21日(月)
場所 谷川岳成蹊大学虹芝寮と芝倉沢
行程 5月18日夜各自虹芝寮集合、5月19・20日 技術講習会、毎夕ミーティング 5月21日 ミーティングの後午前10時頃解散
講師 ヒマラヤをはじめ海外登山の経験豊富なメンバーを予定、講習生3名に講師1名の割合で指導にあたります。

保険・懇親会費等含む。交通費・食費各自負担。申込み後、個人的理由での解約には参加費をお返ししない場合があります。
申込み 日本山岳会事務局で電話で受け付けます。受け付け後申込み書を送付します。受付締切りは4月30日(電話03-261-144三三)参加者多数の場合は先着順。
参加者説明・準備会及び机上講習会を5月上旬に予定。
(指導委員会)

第17回木暮理太郎翁 碑前懇親会

日時 5月19日(土) 20日
場所 山梨県須玉町金山平
行事 19日午後4時より碑前祭
同日午後6時より懇親会
20日、金峰山またはみず
がき山に登る

宿泊 金山平有井館
申込み ルーム事務局
締切 5月11日
定員 40名(先着順)
その他詳細は次号。

第三七九回小集会

御在所岳藤内壁
日時 5月19日(土) 20日
場所 鈴鹿御在所岳藤内壁
申込み 日本山岳会東海支部
詳細は次号に紹介。

会務報告

1月理事会
1月11日午後6時30分
本会ルーム

▽出席者 西堀会長、望月、折井
各副会長、宮下、高遠、小倉、
中川、橋本、鈴木、黒石、越田、
田村、嵯峨野各理事、片岡監
事、浜野、金坂、松丸、小原各
評議員
委任 大森(薫)理事、山崎、
近藤各評議員

▽議案

・昭和54年度予算案作成について
(高遠)
現在の財務関係の状況を説明、
54年度の収入見込みから大幅な
事業の拡大は無理である。収入
増の方策、会員拡大について考
えること。

▽報告事項

・海外連絡 (鈴木)
中国との合同登山推進をはかる
・遭難対策 (橋本)
2月に山の危険防止研究会を開
催する
・青年懇談会 (橋本)
夏にドイツとの交流登山を計画
・婦人懇談会 (黒石)
パミール登山参加は一年延期
・山岳研究所 (小倉)
53年度は経費節約と利用料収入
が予定通りで、健全運営となる
・集会 (中川)
3月24日新入会員オリエンテ
ーション

ルーム日誌

(53年12月)

2日(土) 支部長会議 晩餐会
4日(月) 理事会
6日(水) 婦人懇談会
7日(木) 婦人懇談会
8日(金) 学生部集会
14日(木) 忘年会
15日(金) 指導委員会 遭難対策

委員会

18日(月) 図書委員会
19日(火) 青年懇談会 ヒラリ卿
歓迎パーティー
21日(木) 指導委員会
今月の来室者 三七五名
会員移動(12月)

姓名変更

7677 塩浦 玲子→西堀
支部入会
6655 翠尾 泰典 岐阜支部
代表者変更
1223 立教大学山岳部 牛窪
浩

名誉会員

865 成瀬 岩雄
1024 後藤 幹次
1033 藤島 玄
1046 角田 吉夫
1049 津田 周二
永年会員
1068 交野 武一
1078 菊地 正蔵
1083 笠原 藤七
1084 小池 文雄

昭和五十四年三月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四
サンビュウハイッ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森 久雄

電話東京(03)四四三三
振替口座東京三二四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂